

操作主義的思考の地平を越えて

原野利彦

Beyond Operational Thinking

Toshihiko HARANO

問題意識

近代教育は主体としての個人の形成をもって原理とする。ところが長期間化する学校教育にもかわらず、否、学校教育のために、この「個人」が脆弱きわまりない「主体」らしくないものとして形成されているとすれば、それはどのような事情によるのであろうか。「自己」が自らの Identity, つまり一貫性を与えるために依拠する「基準」は何なのか。「情報」化する時代の流れ、つまり現代という歴史的一幕に、その「基準」を求めるとしたら、それは「自己」に Identity を与え得るであろうか。本論考では、「個人」と、それに支えを与えるはずの現代人の生きる世界との関係を操作主義的思考の地平の克服という文脈において考えてみた。

【1】「自己」と「超越」

近代の教育は「主体」としての個人の形成を原理とする。つまり、近代は世界を認識する準拠枠を自己から調達しようとする。このことを巡って近代の教育は様々な難問を原理的に抱え込んできた。

まず、この「自己」は自らを根拠づけ、位置づけ、方向づける何らかの文脈を要請する。この文脈によって連続性が確保されなければ、個々の体験を関連づけ、意味あるものとすることができない。我々は方向を失って「途方にくれる」ことはよくないことだと暗黙裡に信じ込んでいる。途方にくれることが怖いので、道に迷いそうになるとすぐに歩き慣れた道へと引き返すことが殆ど本能的なものになっている。思考は通い慣れた道のみを好むようになり、それが妥当だと判断される。我々は道に迷うこと、つまり無意味には耐えられない。すべてを必然の相のもとに切り縮め、収納しておきたい。こうして、慣習、伝統、歴史、文化という歩き慣れた道は我々の教育内容として「自己」を形成する媒体となる。我々はさらに、この道筋を学習できるようにカリキュラムをつくる。

しかし、実在はいつも偶然的なものである。だが「自己」は意志する存在として責任をもちたがる。我々は、そもそも責任を持つことなど出来ない存在かもしれないが、やはり持とうとする存在でもある。なぜなら意志が責任を持ってないとしたら、意志は敵意になり、一切は滅ぶに値すると説法するに至らざるを得ないし、このことに我々は恐怖するからである。如何なるニヒリズムも、どこかで責任を持つ「自己」という近代のイデオロギーと妥協しているのだ。

このように、神と呼ばれたり、社会や歴史、伝統や文化と呼ばれたりする根拠に基づき、我々は「自己」を設計しようとして重荷を背負う。これらの根拠は個人にとっては「超越」的なものである。たとえ超自我と呼ばれようとも。勿論、「自己」と「超越」は、なかなか融和するものではない。人は「超越」と「自己」との連続性と断絶のあり方を巡って苦しんでいる。仮に融和を目指すとしても、抽象的な「超越」に融和して「自己」を抽象化するか、具体的な「自己」に「超越」を融和させて、「超越」を無に帰さしめるか、ということになるからである。一方では、人は永遠について語り、行方知れずになった宇宙の生命の「イメージ」に酔い、存在の「暗号」を「呪文をもって呼び出す」。例えば、シンボルを重視し、「子供の宇宙」を大事にせよと言ったり、「存在の呼びかけに応えよ」と教えたりする。他方では、「自己」は、あらゆるものを自分より価値の低いものと見做して、これらを「道具」とみなし、これを使いこなす能力を育てることをもって「自己」の形成であり、教育であるという。道具に囲まれ、これを使いこなすべき主人公になった「自己」は、自らの価値を自分の中から調達しなければならなくなる。我々が価値を受け利用するものにすぎない道具が我々に価値を授けてくれるわけがないからである。「自己」は夜郎自大になって膨張し続け、やがて破裂する風船のようなものになる。

【2】近現代では社会的・歴史的なものが「超越」となる。

多数の者は、永遠の代償として当座しのぎの「基準」を設け、これを「現実」的基準として、差別をしたり、差別撤廃の動きに「参加」する「時代の要求」に従おうとする。確かに近代人はかつての当為と実行の乖離（汝なすべしに應えることの困難）を乗り越えたと信じた。しかし、意欲と実行との乖離（私は欲する、しかし……）に苦しんでいる。近代以前は、天が当為を人に負わせた。近代では人間自身が意欲することを「自己」に負わす。かつては一切が運命であったが、近代では一切が自由であるように見える。まことに、ニーチェも言うように、神が霊であるという者は、肉体をもった神の再生によってでなければ償えないような不信仰に向って大きく一歩近づいているのである。「自己」に徹底すれば、ニーチェと共に「何事ももはや真実ではなく」、「すべてが許されている」と言わなければならない。我々はニヒリズムの両義性を生きなければならない。つまり強いニヒリズムと弱いニヒリズムとを。新たな生への欲求か、生への嫌悪かのいずれかを。

新たな生を目指して我々は過去の重みから解放されることを欲する。しかし、この欲する意志そのものが過去の枠組みの鎖に縛られているのである。しかし、我々は過去に対しては無力である。だから意欲することは「罪」になり、「罰」になる。しかし、過去は我々に何をなすべきかは言わない。また我々も「進歩」の名において、過去と密通しつつ過去を置き去りにする振りをする。この空虚な身振りにもかかわらず「自己」は「意志」を僭称せざるを得ない。

「超越」と言っても、それが「高い」ものであったり、「強い」ものであるとは限らない。そもそも高低、強弱、左右などの宇宙的ヒエラルキーそのものを我々は否定しているのだ。我々はきわめて俗的な政治的経済的、軍事的なもので日々の判断「基準」を間に合わせている。仮に高く強い過去の出来事であっても、そしてそれが現代に生きる者を鼓舞し得た

としても、それは全くコピーとして、つまり現代との違いを薄められ、縮尺され、「客観化」したものとして現代の「強者」を鼓舞するだけだろう。そこでは寸分変わらないものは、二度と出現しないことが忘れられ、過去は「典型」として現代の「強者」「賢者」の間尺に合うものにされており、尊敬され、「教材」化されている。このモデル＝伝統こそ「超越」である。自分の物差しで測った「超越」である。これによって個々人は自らの Identity を確立しなければならないというわけだ。

現代人の間尺に合うように縮減された「歴史的モデル」が、今、現在生きている現代人自身を葬ろうとしているのである。「死せるものをして生けるものを葬らしめる」ということは歴史的「事件」を現代人の尺度によって縮減するということである。「自己」が「自己」の尺度である。近代の世俗的「超越」が我々に「目的」や「生きがい」を与え続けている。縮減する能力に長けた者である専門家が、縮減することを意味づけと同義語にし、現代人を教育し治療する。専門家は偉大なことをなす能力の有無にかかわらず、偉大なことに通暁している者と見做される。

近現代では、価値という言葉は効果や強調点や優先順位という意味にまで切り縮められている。物事の推移は「進歩」であり、「発展」であり、世論の動向や世の流れであるとすれば、それは尊重され、崇拜され、価値となる。宇宙のヒエラルキーは軽視されてきた。だから「地球にやさしい」などという滑稽きわまりない言葉が「学問」の世界にまで浸透しているのである。

「個人」は、ここで奇妙な立場に立たされる。「自己」は自らの一貫性を貫こうとする。しかし、「道具主義的」な効果や強調点や優先順位はこの一貫性を確保するための文脈を提供する「基準」にはなり得ず、「自己」は自分自身と一致することをやめなければならなくなるからである。神の權威の全き代理人であることによって「個人」であることを主張することをやめた以上、「個人」であるためには、自らを定義し、方向づける權威を自らの中から紡ぎ出すか、どこからか密輸入しなければならない。これをヘーゲル流に「自己止揚」と名づけて、「矛盾的存在としての自己」などと言うことの出来ない者は、ニーチェやシュティルナーのように「神の死」を宣告することによって、あまりにも通俗化されて「現実」化されてしまった「自己」に死を宣告する。それも「人間の死」として大仰に宣告する。そして「超人」を希求するに至る。

【3】アイロニー

かつてルカーチは「小説の理論」で、アイロニーが小説にとって不可欠の概念であるとして、この個人と超越の関係を次のように言った。

「小説にとっては、アイロニーというものが、神に対立する詩人の自由であり、継承化の客観性を先験的に規制しているものなのである。……終局までにたどり着いた主観性の自己止揚としてのアイロニーは、神のない世界において可能な最高の自由である。それゆえ、それは単に、総体性を作り出す真の客観性の、唯一の可能な先験的条件であるばかりではない。それはまた、この総体性を、すなわち小説を、時代の代表的な性質にまで高めるものなのである。そして、小説がそのような代表的な形式になるのは、小説を構成する

諸範疇が世界の状態に本質規定的に突き当たるからなのである。」(原田義人, 佐々木基一 訳)

神なき時代の自己超越とか個人の亀裂などという言葉もアイロニーの要素を失えば、たちまち近代的まじめ主義に陥る。一癖もふた癖もある道化的、問題的人物によってこそこのアイロニーが現れる。新しい知覚と経験の世界を開くものとして近代的自己があるとすればアイロニーは欠かせないのである。

上に述べたように、近代では社会的・歴史的なものが「超越」の性格を帯び、それが、その成員一人一人に恒常的な反応をなすことを要求する。近代は伝統的な形而上学の問題にとって替わるものとして「社会」や「国家」、「歴史」という概念を成立させた。そして、それらが動機や目的を与え、集団的ないし個人的な性格を成立させるべき情念を存在せしめるという図式が自明のものとなる。「個人」は、(光=啓蒙の光)に照らし出されながら自らを教育し、自分を「自己」として出現させていくという仕掛けである。個人は様々な経験をこれらの「基準」によって規定されながら、「直接的体験」をしつつ生きていると思込むようにされる。それはそれなりに或る一貫性を装っているために、日常的で自明のものと思われている。そこでは、一方で慣習、伝統、歴史に関する様々な概念装置が作り出され、他方では、情念は自分を満足させる遠回りの手段として社会的・歴史的なものを利用するという暗黙知が成立する。自分の情念は国民や国家という文脈において正当化され、通用する形をとって発露しなければならないことになる。勿論、現代の大衆社会においては、この公的超越も極端に低俗化されており、俗人の日常的駆け引きの世界のみが「現実」とされている。つまり超越と俗的自己とはヒエラルキーを異にするものではない。

この自己と「低俗化した超越」の両者は統一を目指す緊張関係において、そのダイナミクスがあることが正当とされる。「参加」は今では宇宙的秩序に与かることではなく、政策の立案過程への住民参加などというレベルでのみ考えられ、「情報」公開が美德となっている。

それが「自己」の側に引きつけて世界を裁断しようと社会の側から個人を定義しようとするものであろうとも、我々は社会的・歴史的というレベルでのみ「超越」(価値、基準)について議論する。個人を原点とする近代においては、制度や社会組織を考察の対象とすることは、正しい〈価値・基準〉と〈動機・行動〉の関係を究明し、人々の情念の一定のあり方を探ろうとするものとして理解されている。世俗的「超越」の世界にこそ近現代の教育は成立するのである。

プラグマティズムはこの態度の端的な表明である。プラグマティズムは情念を個人の内面に閉じ込めてしまった近代を越えようとしている。それは近代の《主-客》の図式を越えて、出来事を「状況」のもとに開き「現代的」思想になったように見える。しかし、それは社会的・歴史的なものとの関係を操作主義の地平において図式化したものにすぎず、「出来事」を社会的・歴史的なものに閉じ込めていることにはかわりがない。それは、すべての事物を「道具」と見ることによって、「自己」を中心として世界を把握

メカニズムを構成しようとする足掻きであり、物事を私的關係との絡みでのみ見ることを正当化しようとする現代人の孤独な叫びの一つなのである。

【4】「情報」社会のモラリストと相対主義

現代においては、我々は「自己」を知ろうとする場合、心理学者である前に、社会・歴史・文明評論家（本来の意味でのモラリスト）の態度をとらねばならないことになる。なぜなら、自己は、然るべき行動や態度を取り、維持していくためには、何らかの正常値を設定し、正常と異状の区別をなしつつ生きることが前提として求められるからである。また現代ではこれが社会的・歴史的な範囲で調達できる「超越」に限られるからである。また現代ではこの時にのみ自己は「基準」となることが許されている。そしてこの「基準」を起点として、様々な分節化を行っていくものと見做される。

さて、「自己」がこのような起点として措定されるや否や、あらゆるものが「自己」を目がけて殺到してくる。「自己」は出来る限り門戸を開こうとするが、オープンマインドが美德とされる限り、いくら開いても開きたりない。殺到し、流入してくるものに敬意を払うためには、きちんとした順序で整理をしなければならない。しかし、流入してくるものは前後の区別もなく、また相争ってくるので、これらの混乱の巻き添えを食わないためには、これらの要素に対して、強圧的に支配せざるを得なくなる。次々と絶え間なく訪れる客人に対して「君等は道具にすぎない」という失礼な道具主義を振りかざさざるを得なくなる。寛容は無礼に変化する。事実、かつては帝国主義はきわめてモダンな「自己」のあり方として登場し得たのだ。それが無礼で野蛮であることは言うまでもない。

このような状況下で、イメージーションや観念の概念装置が様々に考案される。イメージーションは殺到し、流入してくる諸「体験」を漠然と取り纏めるという局面から、劇場におけるようなくっきりした情景というような局面までの意味までをもたされる便利な概念となる。この概念に「場（舞台）」とか「主体（登場人物、主人公）」などというかなり輪郭のはっきりした分節以前の局面まで含ませることによって、この騒々しい門戸解放をコントロールしようとするのである。そして、この概念は多次的、多面的な諸局面が輻輳し統合され分節化されていくにつれ、「自己」が成立し、同時に、それに相対する対象も形成されていくというシナリオを通用させるのに大いに重宝する概念なのだ。他方「超越」は社会学、歴史学において精密化され、「自己」が成立していく文脈を提供するものとして権威をもち始める。その他の専門的分野も族生する。そしてこれが「自己」準拠による諸「体験」のコレクションを統制する権威ある知恵と見做されるに至る。科学と専門家が権威を持つに至る。

このような文脈において「自己」が形成されていくプロセスの基底には、統制原理としての「正常」感覚（正常値）がある。現代においてそれは社会的・歴史的な性格を強く持つことが強く意識され始める。個々の人の「性格」や行動の逸脱の程度（正常値）を社会的・歴史的なものによって測り、それによって彼の状態が理解出来るとする。しかし、このことは、それは行動が自然であるか不自然であるとか、「自己」が正常に形成されているか否かを絶えず社会的・歴史的な枠組みでイメージしていく過程自身への反省の可能性

を開くことである。それは社会的・歴史的なものへの意義申し立ての余地を作ることでもある。つまり、彼が「状況」に正常に適應しているか否かを定める枠組みが社会的・歴史的によって規定されるものと暗黙裡に前提されていることから自由になりたいと「自己」が思い始めることを可能にするのである。これは同時に、「社会的要求」とか「未来への展望」とか、「進歩」、「発展」などという概念装置が相対的なものであることも自覚され始めることでもある。

【5】抽象体、影と化した形成物、シミュラクル

しかし我々は、価値を高度な社会的・歴史的認識とするだけで満足できるであろうか。情念はその範囲内にとどまるべきだという「現実」的な考えを自明視することが現代の高度な文明であると自惚れておられるだろうか。知性とは情念・関心が社会化・歴史化することを促進する過程であるとされて、我々は賢明になったと言えるだろうか。知性を社会化・歴史化しつつある情念のことと同義となるとすることは我々から「生命力」を奪うことではなかろうか。我々は歴史に「参加」することを美德とする価値観の中に閉塞することで「人間らしく成熟する」と言えるだろうか。

この地平にとどまる限り我々は絶えず流入する「情報」に忙殺され、挙げ句には物事を真面目に受け取らなくなり、ただ新しい刺激のみを求めたり、「教養」を貯め込んだり、「知識」を貯め込んでテストに強い人間になるだけである。つまり薄弱な人間に成り下がってしまう。物事に対して投げやりになり、便宜さだけを求めていく生活習慣のもとでは野蛮に対する無感覚が育っていく。中途半端で、腰が決まらず勝手気ままな生き方をするための「情報」と教育が幅を利かす。いじめ、校内暴力は起きるべくして起こったものと言えよう。子供たちはだらしなく不確かな便宜主義を学んでいく。「さりげなく自由に」と言いながら、実は単なる安易さ、放縦、自己克服の努力の節約を願うだけである。生彩を欠き、使い古しの学校用語で、下手な模倣を「学習」と思い込ませる。自由な意志を尊重すると言っても、思慮分別なく、ただ焦っているにすぎない気分をインタビューし、アンケート調査して、体勢順応を促しているだけだ。自由とは安易にやり過ごせるルールに乗っていた気分を世論の名において正当化することにすぎない。総体としての強さを要求するのではなく、わずかな美点を探し出しては褒めそやすことが教育とされる。子供たちはわずかな美点を認めてもらおうとあがき、認めてもらえないと不貞腐れる。こうして子供たちは益々懦弱になる。我々はもはや現実的に感じたり考えたり出来ない。学校の知識で充満した感性や、マスコミ的「情報」を模倣した朦朧とした視界を持つにすぎない。日常生活とは粗暴と隷従に馴れた人間が、「情報」という名の、偽造され、彩色され、粉飾された抽象物によってもものを見ることと同義になる。時代に迎合するような意見を持って物事を測り、そのような見解を持つものの集まりを「参加」と呼び、その意見の集積を「客観的」という。当世向きの浅薄さを当てはめず、通俗の見解に与しない者を指して「主観的」という。誰でも知っているありきたりなテーマ、日ごとのメロディー、些末な経験をことごとく調べ、凡庸な意見を多数派として称揚し、世論の動向を見て遅れまじと凡庸さに屈伏する行動を「参加」という。このように我々が「情報」によって毒されているとすれば、どこに希望があるのか。文化人、学識経験者と自称する者が、偽物で、

「情報」によって誘惑する者たちだとすれば、「教養」に「参加」する「教養俗物」と、それを無視する「大衆」との交流は活発となり、混合され、強い人間を育てる「教養」の土壌は流出してしまい、文化は衰退していくばかりとなりはしないか。

そもそも「自己」の形成過程を見るパースペクティブは「外」を必要とする。だがこの「外」は「自己」―「社会・歴史」の相互関係の枠内の「超越」で確保できるだろうか。我々はこのような疑問を持つことなしに、社会的・歴史的な「超越」に遠近法を依拠させることにとどめたままで満足している。「多様な視点」、「多層的な現実」という決まり文句が幅を利かす。我々は相互に模倣し励まし合って懦弱になろうとしているのである。我々の「現実」的「超越」とはその程度のものなのである。パロディ化する精神、アイロニーの精神だけが、何とか「自己」を準拠「基準」として維持しているのである。若者のギャグ好みは、かかる危機への遠回りの適応形態であろう。

フルタイムの出勤、出席を強要して、あらゆる生の根から人々を切り離し、そこで「専門家」の粉飾だらけの指導を受ければ、ものすごい奇形の文化が作られていだけだろう。我々の日常性は難民状態にある。これが「主体」としての個人の形成を原理とする近代の教育の実態である。

その実態はよく知られている。我々は次のような「生命力」の場を教育の場と称しているのだ。

孤立し悩む教師たち

東部中学校（愛知県西尾市）26歳の女教師は教壇の机に突伏して泣いた。いじめグループをいくら注意しても余計騒ぐ。収拾がつかないまま、終業チャイムが鳴り、職員室でも、また泣いた。大河内清輝君の担任だった。同僚に相談したという印象無し。校長は「普段からよく泣いている先生だったので、同僚もたいしたことはない、と思っていたのではないですか」担任の相談相手は大学時代の恩師だったようだ。二ヶ月に一回ほどの割合で訪ねた。恩師は「家庭にまで踏み込んで指導すべきかどうか、悩んでいたようだった」という。教師も子供と同様に一人で悩んでいる。担任はクラスの問題を恥じだと思っている。プライドを傷つけないので他の教師は手をこまねいている。学年全体で話し合おうとしても、担任はしばらく様子を見ますという。他の教師も余計な仕事を抱えたくないので黙っている。3年の教師は進路指導で忙しい。体験入学の引率や個別指導など。教師向けの校内研修が月に七回もあった。学校全体でいじめ問題について急に話し合いを始めたのは、文部省のいじめ対策の通知を受けてから。矛先は教師に向うので教師は抑え込むのに懸命になる。スポーツのクラス対抗では足手まといのろま。「正直言って、いじめる側に立って、いじめられる生徒に我慢を強いる方が楽だ。」事件後東部中学校では「健全育成会」の名前で、当面の学校立て直し案として「愛のパトロール」など40項目の対策を挙げた。（朝日新聞 94年12月27日）

かかる教師に「変革」を迫る「識者」といえども自己の人格の「変革」を賭けて意見を吐露することはない。学者として、政治家として、ジャーナリストとして仮装し説教するのだ。「虚構」の作り手も小説家として、あるいは「ノンフィクション作家」の役割を果たすだけだ。「虚構」と「現実」の境目まで分からなくなるように、彼らは何から何まで分析し、関連づけ、解釈してしまうので「出来事」はたちまち死んだ断片の集積にされてしまう。他人の行動は分解され、生命を奪われる。これを客観的研究とか批判、批評という。回想から自筆年譜に至るまでの虚偽で固め、ほとんど抽象体、影と化した教師が「教室」で「自己変革のための投機」を叫ぶ。行動はステレオタイプで、危ないことには一切踏み出さないが、学問的に考え、書き、印刷し、語り教えることに関しては全面的に自由に振舞うことは事実である。安全無害な饒舌家や役に立つ研究者として。客観と化した者はもはや人格に働きかけるといえることはない。それでも人間であろうか。考え、書き、喋り、役に立つロボット、サイボーグではあるまいか。まさに人間ではなく「形成物」なのだ。しかも形成物たるのが教育の効果だと称揚されるのである。しかし、残念なのは拙劣な形成者と劣悪な被形成者とが向き合っており、しかも「自己変革」を叫んでいることだ。抽象体、影と化した形成物。仮装。シミュラクル。「ローマ人がインポテンティアと呼ぶところのものの中に、現代の人格の弱みが露われている。」

【6】基盤を失った教育や学習

近代的枠組みによって、我々は「現実」から隔てられている。だから我々是不毛の行動に立ち戻ることを拒否せざるを得ない。我々は自分達が自由に振舞える新たな「公的」時空間を作り出すことさえ出来ない。刻々の「出来事」や「体験」には名前すらつけられない。遺産は遺書なしに残されるのだ。教育された通りに、合法的に「体験」を積み重ねようとするれば、自らの「体験」は霧散してしまう。「体験」を位置づけ、その価値を、それぞれを選択し、名前をつけ、連結し、保存し、指示する文脈がなければ、過去も未来もないにもかかわらず、力の弱い文脈によってのみ考えることだけを教え込まれてきたのだ。現代的思考の枠組み内でつくられた記憶を働かしてもたかが知れている。我々は力のない文脈にすがって、すべての「体験」を見慣れたものとして扱い、ありふれた名前をつけてやりすごすか、もしくは、すべての文脈を断ち切って途方にくれてしまうかのいずれかか選べなくなっている。後者の場合、我々は刻々の「体験」があまりにも見慣れないものであるため、それにどのような名前をつけてよいか分からない。このように、継承し、問いかけ、考え、記憶する精神がないとき、教育は成立困難になる。伝統によって受け継がれてきた解答がもはや有効でなく妥当でもないとき、つまり、「権威」や「自由」が語れなくなったとき、教育や学習は基盤を失う。記憶がなければ明瞭に発音することも出来ず、したがって、出来事は語ることの出来る物語にはならない。丁度、円がその中心に拘束されるように、学校の知性は、もはや如何なる出来事とも繋がってはいず、無意味になるか、具体的意味を失った古い言説の焼き直しにしかすぎない。このような困った事態を前もって認識することさえ、今では馴染みのものになっている。トックヴィルの言うように、「過去がその光を未来に投げかけることをやめたので、人の心は闇をさまよっている」のである。学校的・技術的理性は「現実」を通さなくなった光である。世代継承の形式は知

識技能、態度の連鎖に文字どおり忠実でなければなるまい。だがこの連鎖の文脈が見えなくなっているのだ。隠喩に近い形で出来事や体験を描くことも困難になっているのである。理解するということは何事かを出来事として浮かび上がらせ、自分と世界にリアリティを感じる方法である。しかし、学校の理性は難問に解答を与えることはもとより、適切で意味のある問題を提出することさえ出来なくなっている。「参加」という合い言葉は声高に叫ばれ、「問題と共に生きよ」と呼びかけてはいるが、その内容は空疎である。

【7】社会的・歴史的なものの極限

ここに、この「自己」と「社会・歴史」との相互関係を越えた地平を求める動きの必要が生じる。換言すれば、社会的・歴史的なものの極限において、それを越える地平を求め、その文脈の中での操作的適応の枠を超えようとするのである。それは社会的・歴史的なものを、閉塞をもたらす元凶とみなし、それからの解放を希求する立場である。なぜならその地平は「超越」に見えるが、実は現代人が相互にコピーし合った自己像にすぎないからである。それも「教育的関係」や「情報」の「発信—授受」とか「双方向」の名において、拙劣な形成者と劣悪な被形成者とが向き合っているにすぎないのである。閉塞感を持つのは当然すぎるほど当然であると言ってよい。

隷属の力量の相互コピーという増幅によって掻き集められた「情報」の中でうごめくことを拒否し、操作的適応の枠を至上とする近代的文脈を超えようとするのは、我々にとっては非常に困難である。なぜなら、現代において生きていこうとする限り、我々はユーザーとしてのみ位置づけられるからである。そこでは我々は技術社会をトータルに捉える力を奪われているために、歴史の総体に否定的に関わることを妨げられている。

このような近代的文脈を超えようとするのは「現実」には何の変化ももたらさないだろう。しかし、それは「現実」を俯瞰する高度の地平を可能にする。なぜなら、それは近代的遠近法をもって過去、未来を見ることを拒否する地平であるからである。それは現代の「現実」に比すれば「虚構」の時空間と言えよう。これを「第二の現実」と言ってもよい。例えばニーチェの「超人」のように。

ニーチェもいうように「生存とは絶え間のない『……であった』ものであり、おのれ自身と矛盾撞着するものだ」とするならば、我々は社会的・歴史的な過去に囚われつつも、それを忘却し断絶した瞬間を生きるという地平を見ざるを得ないのである。西田も言う。「歴史的世界においては、否定せられるものが否定するものを定める。否定するものが否定せられるものの上に立つのである。歴史的事実は何時も自己自身が否定するものにおいて自己自身の実在性を持つのである」と。我々はこの西田の「自己自身が否定するものにおいて自己自身の実在性を持つ」という言葉は文字どおり受け取らねばなるまい。つまり、「自己」は打ち砕かれねばならないという意味での「否定」である。観察者、実験者、傍観者による対象操作を越えた自己否定である。

【8】「非—時間」的「虚構」をつくる思考を目指す

我々は、《リアリティのある経験対青白い抽象的な精神過程》という図式を捨てて、「抽象的な」最小限の経験から、正確な「虚構」を作り出さなければならない。それは「現実」

以上に豊かさ、変化、劇的要素を秘めていなければならない。学校的理性による「未来」とは何か。それは右往左往する現代人によって切り縮められた貧弱な時間感覚による展望でしかない。もはや「時間の裂け目」や、それを可能にする人間存在という「否定」の力も仮定できない。巨大な「情報」技術の世界に我々は、もはや「自己」を介入はおろか、挿入することすら出来ない。我々の新しい時空を発見することは出来るのだろうか。しかし、我々は「時間の裂け目」に立たされていると絶えず言い続けられ、「生涯学習」や「危機」管理の知性や、絶えず「死と再生」の瞬間に生きるように説教され続ける。だから我々は「現代的」な時間・空間化による破滅から自らを救い得る「非—時間」を求めねばならない。

しかし我々には「非—時間」のための装備もなければ準備もない。しかし、この「非—時間」への欠乏感はいわゆる「知識人」や「専門家」に限定された経験ではないのだ。すべての人の感覚で捉え得るリアリティなのだ。しかも難問なのだ。我々は演繹し、帰納し、結論を引き出すという知的過程とは違った「思考経験」をしなければならないようだ。つまり無矛盾性と内的一貫性という論理的ルールを学び、あとはただそれを適用すればいい、という思考経験から脱却しなければならないのだ。空っぽの殻だけになりリアリティを失ってしまった「学術用語」や「日常語」、「学校的ことば」から脱却し、「非—時間」的「虚構」をつくる思考を目指さなければならない。

〈参考文献〉

- ニーチェ : 「反時代的考察」 一生に対する歴史の利害 5
西田幾多郎 : 論理と生命
K. Lowith : Von Hegel zu Nietzsche, 1941